



TITLE:

<論文>ドイツ語Hexameter詩行におけるAmphibrach語脚

AUTHOR(S):

松波, 烈

CITATION:

松波, 烈. <論文>ドイツ語Hexameter詩行におけるAmphibrach語脚. 文芸表象論集 2014, 1: 1-25

ISSUE DATE:

2014-03-31

URL:

https://doi.org/10.14989/LAR_1_1

RIGHT:

ドイツ語 Hexameter 詩行における Amphibrach 語脚

松波 烈

Zusammenfassung: Der Amphibrach (v-v) als Wortfuß, dessen erneuerte Definition und Anwendung bei der gegenwärtigen Metrik wir in 1.1, und ursprüngliche Wesen bei Klopstock und Voß in 1.2 und 1.3 knapp dargestellt sehen werden, wurde im frühen 19. Jahrhundert innerhalb des deutschen Hexameters sowohl von den klassizistischen Meistern, als auch in den verbreiteten, allgemeinen Publikationen – die die Einführung in die Verslehre bereiteten – deswegen für unangenehm bezeichnet, weil er dessen kraftvollen Rhythmus, mit dem er die Großartigkeit der feierlichsten Gattung, des Epos, zum Ausdruck bringt, mit seiner schwächlichen Bewegung weitgehend verhindert. Die Feststellung solches Verrufs von Voß um die Jahrhundertwende und den nachfolgenden Gelehrten wird in 1.3 angeführt, wobei der gleichsam dieser Sprache angeborene Wortfuß angesichts seiner morphologischen, wie syntaktischen Notwendigkeit der markant höheren Frequenz betrachtet wird. In 2.1 und 2.2 werden seine Vermeidung und zugleich die Unbekümmertheit ihm gegenüber, die die antikisierenden oder „naturalistischen“ Dichter je vertraten, was wir in den konkreten Statistiken zur Schau stellten, behandelt, um ihre Natur – soviel dieser Beitrag erreichen kann – zu erhellen.

19 世紀から 20 世紀にかけてのドイツ文学研究界の傑出した巨人である A. Heusler (1865–1940) が、古典韻律によるドイツ語詩 (Hexameter および Ode) を論じた著名な論文¹ の冒頭に次のような問題提起を掲げている―「Platen の詩は Goethe の詩よりも正しいが、Goethe の詩よりも美しくなくドイツ語らしくないと言われるのをよく聞く。〔改行〕ここで言っているのは西洋古典志向の韻律、なかんずく Hexameter であ

る。〔中略〕さて、このように美しい詩行と正しい詩行とを対置することで、何が言いたいのだろうか」。Heusler はここで、A. v. Platen (1796–1835) と J. W. v. Goethe (1749–1832) を代表に立てて、ドイツ語 Hexameter におけるいわゆる厳格派 Rigoristen と自然派 Naturalisten との対比を念頭に置いている。本稿は Heusler のこの問題提起を受け、Heusler の議論とは異なる議論、ドイツ語 Hexameter 詩行における Amphibrach 語脚だけに着目した上での議論を提出し、この語脚の使用頻度に的を絞って調査したとしても厳格派の作品と自然派の作品の作風の対比が明確になるということを示すことを目的とする。その際には、どちらの作風が評価されるべきであるかといった偏向をともなった議論はつつしんで避けることとする。

本研究が対象とするのは 18～19 世紀のドイツ語 Hexameter であるから、Amphibrach の定義としては、この時代の一般的な詩学書を参照したい。Diltschneider の詩学書の §. 29. 3) によると、「 $v-v^2$ という脚を Amphibrachys (ἀμφιβραχῦς) と呼ぶ。この語は、周りが ἀμφὶ 短音節 βραχῦς という意味である。別名 Skolios、湾曲 σκολιὸς の意味であり、〔中略〕例は Gefilde, die Städte, erkoren 等。Amphibrachys は、長音節が十分に上昇していないまま脆弱な Trochæus [–v] で下降するため、脚が弱い者 Schwachfüßer と呼ばれる³」(原文の斜体字・隔字体は通常の字体にした) という定義がなされている。

本稿は、断りのない限りすべての箇所、韻文の単位である詩脚 Versfuß の各名称を、語脚の考察者らに従って、後者の意味で用いている。また、Amphibrach (または Amphibrachys) という語を非常に多く用いており、文面が煩瑣になるのを避けるという目的で、この語は本稿では、引用文内であろうと、表記はすべて Amb. という略号に統一した。引用文中の下線・太字は、断りが無い限りすべて引用者によるものである。原文をそのまま引用した場合には „“ という引用符を用い、原文からの引用にリズム上の区切り線 (|) を付す等の処置を施した場合、すなわち原文からの精確な引用とは言えない引用をする場合には ‚‘ という引用符を用いることとする。

1.1. 現代のドイツ語詩学におけるリズム単位の諸相

語脚 Wortfuß という概念の提唱者は Fr. G. Klopstock (1724–1803) だとして知られている。本稿にて考察する語脚は、この Klopstock が定義したところの語脚ならびにこれを受けた J. H. Voß (1751–1826) の考えていた語脚のことである。現代の詩学書を見ると、例えば Schlawe が語脚として紹介しているところの、Arndt や Saran が論じている詩行リズム単位⁴ は、語脚とは異なっている。Arndt が論じている ‚Der Mond ist | aufge- | gangen 月が出ている‘ という 3 つのリズム単位は「発音上の詩行単位 Sprechtakt」であって、それは「詩脚 Verstakt と同じものではなくて」、1 つの揚格 Hebung⁵ とこれに付随する 1～6 の音節から成るリズム単位である。⁶ また Saran が論じているところの、‚Von alle- | dem | konnte in | Rom | nicht die | Rede | sein ローマではどれを話題にすることもできなかった‘ というリズム単位も、語脚とは異なるものすなわち「詩行分節下肢 Unterglied」および「詩行分節肢 Glied」という単位である。⁷ Schlawe は S. George (1868–1933) の叙情詩・「原景 Urlandschaft」の第 1～2 詩行 (V. 1–2) を ‚Aus dunklen | fichten | flog | ins blau | der aar // Und drunten | aus der lichtung | trat | ein paar⁸ トウヒ林の暗くなっている所からワシが青空に上っている。上った所のその下方の伐採跡の明るい所からオオカミが出てきている‘ という語脚に分割している。⁹ さらに、Schlawe が最も重視している単位である「詩行分節単位 Kolon」に分割している箇所を見ると、‚Aus dunklen fichten | flog ins blau | der aar // Und drunten | aus der lichtung | trat ein paar‘ とされている。¹⁰ この詩行分節単位こそがむしろ Klopstock と Voß が定義していた語脚に極く近いようである。ドイツ語の詩学においては、詩行のリズム単位は論者によって様々に異なっており、同じ語も論者によって適用範囲が異なる。Arndt が考えていた発音上の詩行単位にもう一度触れると、同じ語を用いて議論しているドイツ語詩学の大家・Minor は ‚der Tauwind | kam | vom Mittagsmeer 湿気を含んだ風が昼に沖から吹いてきた‘ という発音上の詩行単位を示している¹¹ が、これは Arndt の定義に従えば ‚der Tauwind | kam | vom Mittags- | meer‘ という発音上の詩行単位に分節しなければならないだろう。Arndt は発音上の詩行単位を「詩行分節

肢」・「詩行分節単位」・「詩行分節語塊 Wortblock」とも言い換えている¹²が、,aufge- | gangen‘ という 2 つの単位は、Arndt が意識している Saran に従えば詩行分節下肢に相当するであろうし、Schlawe からすれば詩行分節単位であるとは到底言えないだろう。¹³ 本稿はこういった現代の韻律論における紛糾に立ち入ることはせずに、Klopstock と Voß による語脚の議論に的を絞ることにしたい。

1.2. Klopstock の提唱するドイツ語詩における語脚

Klopstock の論文「ドイツ語 Hexameter 考 Vom deutschen Hexameter」は、出所を異にする 3 つの論稿の総称であり、1855 年出版の Klopstock 全集には、3 つが連続する形で収められている。¹⁴ これらの内の 3 つ目の論稿¹⁵ は、極く瑣末なことが述べられているにすぎないゆえ、ここでは検討しない。第 1 の論稿 (以下 VdtH I) は、1748 年に『ブレーメン論集 *Bremer Beiträge*』に 3 歌を掲載して¹⁶ 以来 1773 年に完結するまで書き続けた 1 万 9458 行にわたる大叙事詩『イエス・キリスト物語 *Der Messias*』¹⁷ の 1769 年出版の第 3 歌の序文である。¹⁸ ただしこの序文には頁が記載されておらず出典明記が不可能であるから、本稿は今述べた Klopstock 全集に収録されている同内容の VdtH I¹⁹ を典拠とする。第 2 の論稿 (以下 VdtH II) は、出所が 1779 年出版の Klopstock の雑文集に収録されている論稿であり、²⁰ こちらは頁の記載があるから、典拠として使用することにする。Klopstock による語脚の概念の解説として、VdtH II における次の Hexameter の詩行の例とその説明²¹ が広く周知されている。

Schrecklich erschol der geflügelte Donnergefang in der Herfchar.

軍勢から大鐘音の雷鳴が空に昇った。

この詩行は、Klopstock が「規則としての脚 Fuß der Regel」あるいは「作為としての脚 künstlicher Fuß」と呼ぶところの詩脚の観点からすると、,Schrecklich er- | fchol der ge- | flügelte | Donnerge- | fang in der | Herfchar‘ という 6 脚の詩行であるが、語脚とし

ては ‚Schrecklich erschol | der geflügelte | Donnergefang | in der Herfchar‘ という 4 脚の詩行であるという。Klopstock は後者を次のように定義する。

Di der Forfchrift gemäß gebrauchten Wörter wården, in Anfehung irer Bewågung, [...] Wortfüße genannt. [...] Dife befehen nicht immer auf einzelnen Wörtern, fondern oft auf fo filen, alf, nach dem Inhalte, zufammen gehõren, und dahår beina wi Ein Wort müffen aufgefprochen wården; doch dif unter der Einfchrenkung, daß, wen ein Wort file Silben hat, ef nicht mit zu dãm, welchem ef dem Sinne nach zugehõrt, genommen wird. Denn ef fült in disem Falle daf Or zu fer, um nicht für fich einen Fuß aufzumachen.

規則的に用いている語は、この語の律動という点から、〔中略〕 語脚と呼ぶ。〔中略〕語脚は語 1 つから成るとは限らない。意味内容に応じて 1 語に一体化せざるをえない、1 語のごとく発音せざるをえないというそういった数の諸々の語からも成る。ただし諸々の語から成ることがあるとは言っても、多音節語に関しては、意味内容の上からは帰属しているところの他の語と一体になることがない。かかる語は、語として聞こえる量が十分であり、独立的に 1 脚を構成してしまうからである。

しかしながら、このような定義を下す 10 年前に VdtH I において Klopstock はすでに語脚について論じている。VdtH I は、西洋古典詩中で最も見事に Hexameter を作っていたホメロスよりもドイツ語の方が「さらに多様な」Hexameter を作ることができる²² ところから始まる。その根拠の 1 つは、古典ギリシャ語に全部で 18 の語脚がある一方、ドイツ語の語脚はこれらと同型の語脚の他にさらに 5 の語脚を有しているという考え²³ にあるのであろう。Klopstock はドイツ語の 23 の語脚を列挙し、そのどれにも当てはまらない語脚も見受けられる行を含む 18 の Hexameter 詩行を挙げ、そこから語脚を抽出してきており、同時に Amb.に言及し、この語脚はドイツ語で「頻出する kommt [...] oft vor」が、連続しすぎると詩行が「軟弱 weich」になる

がゆえこれを避けねばならないと述べている。²⁴ とはいえ、VdtH IIにおいては Amb. は「穏やか *famft*」な語脚と定義するのみであり、²⁵ さらに、後に見るような 5 の Amb.が連続する詩行をすでに挙げ (,Aber | da rolte | der Donner | fon dunkeln | Gewölk
| herunter 群雲から雷が落ちてきた') つつも、この詩行に否定的な評価は何ら下していない。²⁶

1.3. Voß による語脚の定義ならびに Amphibrach 語脚の扱い

Voß は Klopstock ならびに K. Ph. Moritz (1756–1793)²⁷ と同じく、近代ドイツ語の音節は、強勢の有無 *betont, unbetont* という区別²⁸ ではなくて発音に要する時間が長い
か短い *lang, kurz* という区別が本質的であって、ドイツ語の韻律もこの観点から構
築すると考えていた。こういった音節考を本格的に記述した著作が『ドイツ語の時量
計測 *Zeitmessung der Deutschen Sprache*』²⁹ である。この書に、Voß による語脚の定義
が見られる。

Wir verstehen unter *W o r t f u ß*s die abgezählte Frist und Bewegung sowohl des einfachen
und zusammengefügten Wortes, als mehrerer in Verbindung stehender, wenn sie nicht über
zwei Hebungen hinausgehn: [...] ³⁰ (隔字体は原文)

語脚とは、単一語または複合語が、或いは、3 つ以上の *Hebung* を含んでいない
ところの数語が有する、一定の発音時間である。〔後略〕

この定義が書かれている「時量の役割 *Vom Zeitverhalt*」の章³¹ は詳細な語脚論と
なっている。今これを詳細に追うことはできないが、いずれにせよ、どのような数語
が 1 つの語脚を形成すると Voß が考えているかということ、Klopstock と相違がないと
いうことに間違いない。Voß が挙げている次のような *Hexameter* 詩行の語脚への分割
を見ると、そのことが確証できるだろう。

Sei der Gefang | vieltönig | im wechselnden Tanz | der Empfindung³²

韻文は異なる情感が交替してゆくのであるから音の調子が多様でなければならない

Voß はこの章のいくつかの箇所で Amb.について論じている。第 V 節³³ に、Amb.は「軟弱 weichlich」であるという言葉が見られる。また、自分「よりも強靱な stärker 語脚に隠さなければ」Amb.は「好ましくない unangenehm」語脚であり、さらには Dionysius の言う通り「いわばできそこない gleichsam gebrochen」で「柔弱かつ卑俗 weibisch und unedel」な語脚であると V. 1³⁴ で述べる。³⁵ V. 3³⁶ の考察によると、1 語による Amb.である ‚empfangen‘ に比べて 2 語による Amb.である ‚empfang ich‘ では長音節がより持続するため、後者の Amb.の方が「より強靱さを mehr Stärke 有する」という。³⁷ また、‚der Saiten Gelispel‘ と 2 つの Amb.が並んでいる場合と異なり、‚das Saitengelispel‘という「二重 Amb.」の場合は短音節 ‚-tenge-‘ がより短くなり広い音域が得られるという。このように述べる理由は、Amb.の長音節は十分に長くなく、例えば Anapäst (vv-) の長音節に「比べると脆弱 schwächer」であって好ましくないと考えている³⁸ からであろう。X. 6³⁹ で、「弱い schwach」語脚である Amb.を連続させる場合について述べる。ここでは、Amb.の連続は、第 2 Päon (vv-v) または Jambus (v-) という Amb.「よりも力のある kräftiger」語脚が後に続く場合等の条件を満たす限り認められるとある。一方「1 の Trochäus (-v) に続く 5 の Amb. [の連続]」については、「これだけは認められない find nicht zu entschuldigen」という言葉が見られる。このような「軟弱かつ単調な律動 die weichliche und einförmige Bewegung」が支配する詩行は、どれほど「穏やかで力強い sanft oder stark」内容をしていても、どれほど表現と響きが見事であっても、それらは歪曲されてしまうという。そしてそのように「歪曲」された Hexameter 詩行が ‚Schrecklich | erschollen | die Donner | vom jähren | Gebirge | den Streitern 山から雷鳴が兵に聞こえた‘であり、内容の力動感を詩行の律動で表現し得ているのが ‚Schrecklich erscholl | Kriegsdonner | vom

jähren Gebirg' | in das Schlachtfeld 山から関の声が戦場に聞こえた' であると Voß は考える。このような考えを Voß は 18 世紀の末頃に、*Georgica* の翻訳に寄せる序文⁴⁰ においてすでに記していた。この序文の XIII～XXII 頁は、Voß の死後に出版される『時量計測』の増補第 2 版 (1831) に付録として収録されてドイツ語 Hexameter 論として知られるようになる⁴¹ 重要な文章である。ここで Voß は、天才的とも言える手法で Klopstock の Hexameter 詩行数行を批判検討し、次に、Klopstock の Hexameter における一見規則違反とも取れる逸脱の意義は理解されておらず「6 数えさえすれば Hexameter をも書けると誰もが思いこんだのだ」と述べ、Klopstock 以降に書かれた Hexameter について、そういった Hexameter は「不愉快な奇形物」であり、この「化物」は、「長音節・短音節・両用音節の区別も意に介さず、醜悪な律動と音調を避けることすらせず〔中略〕信じがたいことだが詩脚を 6 にすることすらせず」、「思いつきで強弱をつけた音節を吼え散らし、〔中略〕別々の語脚を配置するだけという最低限のことすらせず」、時として、「不快な leidig Amb. という〔中略〕何よりも軟弱 weicht な語脚」を 5 回連続させると述べた後に、例として ‚Fröhlich | belaufch' ich, | im Dunkel | der Buchen, | das Zwitschern | der Vögel 森で鳥が愉しく鳴いているのが聞こえる' という詩行を挙げている。⁴² この論稿で、Amb. に対する評価と、Amb. を最多数連続させるような「偽 Hexameter」に対する評価は、明確に確立していたようである。

Linckenheld が「詩行の律動 Rhythmus を Voß は重視しすぎ、Klopstock は軽視しすぎる」⁴³ と述べているように、Voß は、語脚に対する詩行の律動の干渉についても論じている。このことを、Voß 自身の説明⁴⁴ に即して見てみたい。例えば ‚Regnichte | Sommertag' || und heitere | Winter | erlebt euch 雨多き夏と晴れ渡る冬とを祈りなさい“ という Hexameter 詩行は、5 の語脚に分節されるが、同時に、詩行のリズムを形成する Zäsur⁴⁵ という区切り („Sommertag' || und “) によって 2 の詩行分枝にも分節されている。ここでは、2 種類の分節は一致している。一方、‚Braufte der Sturm; || und in Wogen erhob || sich die Wüfte des Meeres⁴⁶ 嵐が起こり海が荒れていた' という

例では、Zäsur である ‚erhob || lich‘ は語脚間の境界ではなく、これの内部に位置しており、そうすることで、‚erhob lich‘ という「Amb.を Jambus (v-)」に変えてしまう。⁴⁷そしてこの点において、Klopstock が Voß に反対する。上述の『時量計測』増補第 2 版に付録として収録された Voß と Klopstock の往復書簡⁴⁸の第 6 書簡 (1789 年 9 月 15 日に Hamburg より Voß に宛てた Klopstock の書簡)⁴⁹で、Klopstock は、「Georgica の序文中「Amb.を Jambus (v-)」に変えてしまう」と述べておられることに関してですが〔中略〕詩行を読む側はそうには断じて思いません。Amb.を読みます。仮にこちらがそのように思って読もうとしたとしても、聴く側はこれを認めないでしょう」と述べている。すでに見たように、Klopstock は Amb.とこの語脚の連続を Voß のように低く評価してはいない。Voß へ宛てる書簡にあっても、「貴君が脆弱 schwach と思われている脚を小生は穏やか sanft と呼びますが、これには理由があります」、⁵⁰「-v と v-v は穏やかな脚なのです」⁵¹と述べ、Amb.に対する Voß の辛辣な評言に反対している。

Amb.に対するこのような評価は、以後の詩学において一般的な見方となってゆく。1810 年代、Reibeck による教本としてのドイツ語学書の詩論の章、Hexameter を論じているくだりに、語脚は詩行中 2 回までしか連続させないものであり、特に Amb.の連続は「起きてしまいやすい *werein man so leicht verfällt*」ものであり、Amb.は Hexameter を「脆弱に跳ねるリズムの調子 *ein schwächlich hüpfender Takt* にする」とある。⁵²数年後 Roth による教本としてのドイツ語学書の付録として出版された Grotefend のドイツ語詩学書に、Amb.に言及している箇所がある。⁵³Grotefend も同じように、「脆弱な schwach」Amb.を連続させることを他の語脚の連続とともに禁じ、これが 5 回連続する ‚Wenig | behagen | dem Ohre | die Verse | mit gleichem | Gehüpf 詩行は跳ね回ることを繰り返していると聴くに不快なものになる‘ という詩行を挙げている。1820 年代の K. W. L. Heyse による教本としてのドイツ語詩学書を見ると、まず詩脚としての Amb.を説明している箇所⁵⁴では、「何よりも脆弱軟弱 *schwächft und weichlichft*」な脚と呼んでいる。Hexameter を論じているくだり⁵⁵を見ると、同一の

語脚の連続が「Hexameter の多様性を損なう」としながら、Amb.を重ねて用いると Hexameter 詩行を特に「不快にとびはねる調子 eine widrig hüpfende Bewegung」にするとして、さらに Reibeck が挙げている詩行例⁵⁶ を挙げつつ、Amb.を連続させてよいのは 2 度までであると述べる。直後の註において、「ドイツ語は忌々しいことに Amb.であふれかえっているが、これは、短音節の接頭辞と接尾辞が多く、さらに強勢のない冠詞と他の前置詞が加わるからである。こうして至る所に Amb.が押し寄せているが、これは避けられないことである。Amb.は軟弱に弛緩した脚であって die weichliche Schlaffheit des Amphibrachys、Voß が精確に語っていたように、どれほど力強い内容も、どれほど見事な表現も、どれほどふさわしい音調も歪曲してしまう」(隔字体は原文)と述べ、Voß が批判していた Amb.が 5 つ連続する Hexameter 詩行(上述の „Schrecklich erschollen [...]“)を挙げている。同じく 1820 年代に、Heinsius のやはり教本としてのドイツ語学書の詩論の §. 549. 4)⁵⁷ には「Amb.、別名 Skolius、弱い脚 Der Amphibrachys oder Skolius, Schwachfuß」とあり、「Amb.は頻出する häufig vorkommt 軟弱な weichlich 脚であり〔後略〕」とある。このように、19 世紀前半には、一般向けのドイツ語詩韻律の解説文章において、Amb.に対する評価が一定していた。ところで、Heyse の指摘に見たように、ドイツ語は語形態の特性上 Amb.をそもそも頻繁に作る言語である。Klopstock と Reibeck もそれに触れていた。詩学がいかに使用を警戒しても、Amb.はドイツ語のとりわけ自然な語脚であり、相当意識的に詩作するのでなければ、詩学の警戒に従うことは難しいであろう。⁵⁸

Voß 及び 19 世紀前半における Amb.の見方は、(i) Amb.は脆弱で軟弱で落ち着きがなく不快ですらある語脚である、(ii) ドイツ語 Hexameter では同じ語脚を連続させるのは好ましくない、⁵⁹ (iii) Amb.を Hexameter で連続させる場合には、一定の条件を満たさなければならない、(iv) Amb.を 5 つ連続させる Hexameter はいかにしても避けねばならないという 4 の項目にまとめることができる。

2.1. ドイツ語 Hexameter におけるいわゆる自然な詩行と厳格な詩行との対比

西洋古典詩の模倣を志向するドイツ語詩において、Goethe, Fr. Schiller (1759–1805) を筆頭とする自然な息遣いの Hexameter を書いた詩人たちと、Voß, W. v. Humboldt (1767–1845), A. W. Schlegel (1767–1845), Platen を筆頭とする規則に厳格であり不自然な響きのする Hexameter を書いた詩人たちとがあるという図式⁶⁰ は、ドイツ詩学ではごく慣用的となっている図式であり、その確立者ならびに支持者と考えられる高名な論者は、Hehn, Levy, Staiger, Kayser, Hötzer⁶¹ 等枚挙にいとまがない。こういった図式を保持する論にあって共通している主張の 1 つに、『ライネケという名の狐の物語 *Reineke Fuchs*』における Goethe の Hexameter が、様々な規則に拘束されない自由闊達かつ融通無碍な作風をしており、或いは、自然な言語使用にのっとった上で散文と見まがう作風をしているという主張がある。このような規定を、こういった論者たちがしばしば陥っている抽象的な乱用に任せずに、具体的に語脚の観点に即して考量してみると、確かにこの作品は極めてのびやかに書かれていることが分かる。Voß が書簡中で Goethe に指摘している⁶² ように Trochäus (–v) が主調を成しているが、それに劣らず Amb. が主調を成している。作品の冒頭から Amb. がふんだんに用いられており、他の箇所には „Gebet | dem Bären, | dem Wolfe, | der Wölfin | zur Sühne | den Widder,⁶³ 熊と狼と狼の妻に羊を補償に“ (6. 389) という上述の (iv) の型の行も見受けられる (他には 2. 52, 6. 259, 6. 389, 10. 287 等)。作品の冒頭 50 行には 74 の Amb. が用いられており、Amb. が連続する詩行が 21 行ある。これらの詩行は、Amb. のふんだんな使用によって、叙事詩の迫力ではなくて、くだけた日常の印象を与える。そういった傾向はことに „Nekräst negibaul geid sum namteflih dundna mein tedachs!“ (12. 403) といった詩行において顕著である (こういった、ドイツ語 Hexameter の枠を超えてしまっている Goethe の詩行は、後の G. Hauptmann (1862–1946) の『オイレンシュピーゲル物語』⁶⁴ の自由奔放な詩行の先駆であると言えるだろう)。Schiller は Hexameter のみを用いた作品は書いておらず、Hexameter と Pentameter とを組で用いる 2 行一組詩の Distichon という韻律を使用する作品を残しているだけであるため、ここでは措く。

Goethe, Schiller と同じく、西洋古典韻文の厳格な模倣派と看做されてはいない人物である Fr. Hölderlin (1770–1843) には、Hexameter のみを用いて書いた作品「エーゲ海 Der Archipelagus」がある。冒頭 50 行を見ると、Amb. が 53 用いられており、これを連続させている詩行が 14 行ある。⁶⁵ Voß が結成していたゲッティンゲン詩人同盟 Göttinger Hainbund (1772–1775) の一員であり Voß との友情が長い間続いていた（が決裂することになる）Fr. L. Graf zu Stolberg (1750–1819) の作風もまた、こういった厳格派のそれと一線を画していたと広く知られている。Stolberg は Voß と同じく『イリアス』の全歌をドイツ語 Hexameter に翻訳しており、この冒頭 50 行を見たい。⁶⁶ 76 の Amb. が用いられており、13 行においてこの語脚の連続使用が見られる。その内の 2 行では Amb. を 4 つ連続して用いており、(iv) の型が見られる行も 1 つある。Klopstock は厳格派とは一般に看做されてはおらず、また、上に見たように、Amb. に肯定的な態度を取ろうとしてもいる。代表作『イエス・キリスト物語』の冒頭 1–51 行 (V. 10 は Hexameter でない) には 48 の Amb. があり、Amb. が連続使用される行は 11 行ある。

次に厳格派の Hexameter における Amb. の使用頻度を見てゆきたい。これらの詩人たちが最も頻繁に言及し意識している Hexameter 詩人はホメロスである。『イリアス』の冒頭 50 行に用いられている Amb. は一行末の音節を長短両用音節 anceps とすれば一わずか 6 である。Voß の自作詩『ルイーゼの結婚 Luise』の初版を見ると、その冒頭 50 行に見つかる Amb. は 23 であり、これが連続する行は絶えてない。⁶⁷ 初期の頃の Hexameter 作品である『ルイーゼ』に加えて、Voß の最晩年の頃の Hexameter が見られるのは、『イリアス』翻訳、1821 年出版の「全面改訂第 5 版」⁶⁸ である。冒頭 50 行には 32 の Amb. が用いられており、これが連続する行は 1 行しかない。この 1 行では Jambus (v-) に隣接する形で Amb. を連続させており、上述の (iii) の条件を満たしていると考えられる。Platen も厳格派の代表的人物とされており、厳格派への鋭い批判者である Heusler が取り上げている⁶⁹ 「カプリ島の漁夫 Die Fischer auf Capri」を例に見ると、その冒頭 50 行に用いられている Amb. は 28、これが連続する行は 5

行ある。⁷⁰ Voß と並んで影響力のあった厳格派の 1 人である Schlegel の Hexameter 詩は、『ラーマーヤナ』からの抄訳である「女神ガンガーの出自 *Die Herabkunft der Götting Ganga*」の第 1 歌⁷¹を見たい。この作品は作者自身が「Hexameter に関しては最大限の配慮を払って書いており、西洋古典韻律論ならびにドイツ語音調論のきわめて厳格な規則に極力忠実に書いている」⁷²と述べている作品である。第 1 歌の冒頭 50 行には、33 の Amb.を数えることができる。これが連続する行は 5 行ある。Hexameter 等を詩作する上で Schiller から相談を受けていた Humboldt もまた厳格派の 1 人として周知されている。Heusler が「凝古典的悪癖の見本」と呼んだ⁷³「ルクレティウスの『事物の本性について』 *Lucretius' De rerum natura*」⁷⁴の全 44 行、及び、この作品と密接に関係している「アラトスの『天界現象』 *Aratos' Phainomena*」⁷⁵の冒頭 6 行の計 50 行を見ると、⁷⁶ 55 の Amb.を用いており、これを連続して用いている行が 10 ある。ところで、Goethe の Hexameter の作風が、西洋古典模倣におけるいわゆる自然派の作風に属していると言えるのは、『ライネケ』ならびにこの人の Hexameter 創作期前期の頃に書かれた Hexameter 詩行に関してである。『ライネケ』の後に書かれた 2 点の Hexameter 叙事詩作品における詩行は、こういった自然派の作風を有しているとはふつう看做されていない。Schlegel と Voß をはじめとする厳格派の影響が作風に顕われているとされている『ヘルマンとドロテアの邂逅 *Herrmann und Dorothea*』では、冒頭 50 行に 50 の Amb.が用いられており、これが連続する詩行はわずか 9 行しかない。⁷⁷ この影響がさらに濃厚であるとされている『アキレスの歌 *Achilleis*』では、冒頭 50 行に 52 の Amb.が用いられており、これが連続する行は 8 行ある。⁷⁸

2.2. ドイツ語 Hexameter における Amb.の位置付け

以上一瞥した通り、ドイツ語 Hexameter においては、西洋古典韻文の模倣を鋭く志向する詩人ほど Amb.の連続使用を控えていることが明らかになった。また、Amb.の使用にためらいがない詩人が、こういった志向を有していない詩人とほぼ一致するで

あろうことも明らかになった。**Amb.**は語脚の 1 つであるにすぎず、他の語脚の使用傾向もすべて研究してこそ初めて特定の詩行の律動が明らかになるのだが、**Amb.**だけに注目して分析を進めても詩人たちの傾向がある程度は明らかになるということの本稿は示した。**Amb.**はドイツ語の自然に即した語脚であり、脆弱・軟弱の調子は、力んだ勢いの表出が通常忌み嫌われるような日常的な空間ではむしろ好ましいものであるだろう。語脚の連続の禁則に関しても、日常的な言語使用はそもそも単調で繰り返しの多いものであり、多彩な語脚が用いられる古典 **Hexameter** をドイツ語で再現した詩行は日常的な言語使用という印象を与えないと言えるかもしれない。身構えつつ力んだ律動は、西洋古典模倣厳格派の作風の特徴であり、そこでは、硬質な響きの単音節語や、いわゆる男性的な詩脚内リズム分割線 **Zäsur** の強さが好まれる—
 ‚Schrecklich erfcholl | **Kriegsdonner** | vom jähén Gebirg’ | in das **Schlachtfeld**‘ に典型的であるように。このような力の漲った律動は非日常的な気分を基調としており、規則が支配する「不自然」な言語空間で主に可能なものであろう。この厳格派の詩人は、行末の音節に、直前の音節よりも強い音節を置くことが稀にある。**Schlegel** ならば
 „Siehe! die Asche, genetzt von der heiligen Ganga, der Welt **Zier**, 聖なるガンジス河という宇宙の美に浸かった灰を“ (*Göttin Ganga*, 2. 42)、**Humboldt** ならば „Eintritt, Göttin, getroffen die Herzen von deiner **Gewalt Macht**, 女神が来られるのを。女神の力に心を打たれている“ (*De rerum natura*, V. 13)⁷⁹ といったものがそうであり、**Voß** も翻訳・自作の **Hexameter** においてこの手法を用いている。『オデュセイア』翻訳には „[...] vernim jezt“ (3. 82), „[...] kann auch“ (15. 391), „[...] legt dann“ (20. 150), „[...] umschloß Nacht“ (22. 88)⁸⁰ という行末が見られ、『農耕詩』翻訳には „[...] des graufen Gewölks Nacht“ (1. 328)⁸¹ という行末が見られ、『イリアス』翻訳には „[...] gewifs noth“ (9. 197), „[...] feuerorkans wut“ (11. 157), „[...] schrien auf“ (23. 847), „[...] allein, zween“ (24. 473)⁸² という行末が見られ、『ルイーゼ』には „[...] besorgt wohl“ (3. 417)⁸³ という行末が見られ、『アエネイス』翻訳には „[...] drang Nacht“ (2. 249), „[...] erschallt Lerm“ (2. 487), „[...] durchglüht Schmerz“ (9. 66), „[...] entzuckt Glut“ (12. 102)⁸⁴ という

行末が見られ、ホラティウス作品の翻訳には „[...] alles behagt schon“ (*Satyren II*, 1. 4. 61), „[...] erwerbt, Geld“ (*Episteln I*, 1. 65)⁸⁵ という行末が見られる。Voß らの厳格派はこういった手法すら用いることによって詩行に力を籠めながらも、いわゆる女性的詩脚内リズム分割線も適宜置き、まさに上述の ‚Sei der Gefang vieltönig im wechselnden Tanz der Empfindung‘ という例から聴こえるような、迫力と優美が結合した響きを実現してゆく。Amb.の排斥によって Hexameter から豊かなドイツ語の可能性はいささかも奪われることはなく、緊張感に満ちた独特の言語空間を展開してゆく。それは Amb.を忌避しない「自然」な Hexameter の打ち解けた気分の実現と同じく、この言語による Hexameter の 1 つの卓越性である。

註

¹ Heusler, Andreas: *Deutscher und antiker Vers. Der falsche Spondeus und angrenzende Fragen*. Strassburg 1917.

² 詩の研究全般において短音節を „v“ と表記し長音節を „-“ と表記することは広く知られた常識であるが、ドイツ語の韻律論においては、抑格を „v“ と表記し揚格を „-“ と表記することもある。なお抑格は語強勢のない音節、揚格は語強勢のある音節のことであると理解しておけばおおむねよい。Hexameter は-vv または--という詩脚 6 つから構成される。

³ Dilschneider, Johann Joseph: *Verslehre der deutschen Sprache*. IV. Abschnitt. Von den Füßen. Köln 1823. S. 34–47, hier S. 37.

⁴ Schlawe, Fritz: *Neudeutsche Metrik*. 2.2.2. Konkrete Einheiten. Stuttgart 1972. S. 47–54, hier S. 48.

⁵ 抑格と揚格に関しては註 1 を参照。

⁶ Arndt, Erwin: *Deutsche Verslehre*. § 3 Die sprachliche Gliederung. Der deutsche Prosaakzent. Berlin, 13., bearb. Aufl., 1995. S. 54–63, hier S. 58.

⁷ Saran, Franz: *Deutsche Verslehre*. § 11. Fortsetzung. Die Zusammenfassung. München 1907. S. 77–93, hier S. 84. この箇所の記述を詳しく見ると、‚Von alle- | dem‘ という 2 つの詩行分節下肢が ‚Von

allem‘ という 1 つの詩行分節肢を構成する。 ‚konnte in | Rom | nicht die | Rede | sein‘ という 5 つの単位も詩行分節肢である。これで 6 つの詩行分節肢が得られた。この内の ‚Von allem | konnte in | Rom‘ という 3 つの詩行分節肢は、 ‚Von allem | konnte in Rom‘ という 2 つの「詩行分節副結合 Nebenbund」を構成する。この 2 つの詩行分節副結合は 1 つの「詩行分節主結合 Hauptbund」(‚Von allem konnte in Rom‘) の下位単位であり、この詩行分節主結合が、同じ詩行分節主結合である ‚nicht die Rede sein‘ と並ぶ。これら 2 つの詩行分節主結合が 1 つの「詩行分節列 Reihe」を構成する。

⁸ Zitiert aus: *Stefan George Werke Ausgabe in zwei Bänden*. Stuttgart: Verlagsgemeinschaft Ernst Klett Verlag – J.[ohann] G.[eorg] Cotta'sche Buchhandlung, 4. Aufl., 1984. Bd. 1. S. 190–191.

⁹ Schlawe, a.a.O., S. 48.

¹⁰ Schlawe, a.a.O., S. 53.

¹¹ Minor, Jakob: *Neuhochdeutsche Metrik. Ein Handbuch*. IV. Der Versfuß oder der Takt. Wortfüße und Versfüße. Straßburg, 2., umgearb. Aufl., 1902. S. 154–168, hier S. 157. 発音上の詩行単位のこの例は初版には見られない。

¹² Arndt, a.a.O., 58.

¹³ Klopstock と Voß の語脚に関する見解も一致していない (Vgl.: Linckenheld, Emil: *Der Hexameter bei Klopstock und Voss*. II. Der Streit um den Hexameter, § 8–60. § 40. Wortfüsse ff. Diss. Strassburg 1906. S. 74 ff.). 詳論はできないが、同じ近代ドイツ語の音節に対して同じドイツの詩人・詩学者たちが取ってきた考えは相互に矛盾・対立・紛糾している。このような点から、韻文の学にはネイティブの特権は存在していないことが理解できる。

¹⁴ Klopstock, Friedrich Gottlieb: *K.s. sämtliche Werke*. Bd. 10. Leipzig 1855. S. 45–161.

¹⁵ Ebd. S. 160–161.

¹⁶ *Neue Beyträge zum Vergnügen des Verstandes und Witzes*. Vierter Band, viertes und fünftes Stück. Bremen und Leipzig, Verlegts Nathanael Saurmann. 1748. S. 243–377.

¹⁷ この作品は版によって各歌の行数に相違が見られる。ここに記した行数は、*Hamburger Klopstock-Ausgabe*. Bd. 1 ff. Berlin / New York 1974 ff. – Abtlg. Werke: IV 1–2. F. G. K. Der Messias. Bd.

1-2: Text. Hrsg. v. Elisabeth Höpker-Herberg. 1974 に基づくものである。『イエス・キリスト物語』
に関してはこの全集を参照する。

¹⁸ Klopstock, Friedrich Gottlieb: *Der Meffias. Dritter Band. Mit K^{önigl.}[ich] Preußifchen und Ch[K]urf.[ürstlich] Sächfifchen allergnädigsten und gnädigsten Privilegien. Halle, im Magdeburgifchen. Verlegt von Carl Hermann Hemmerde, 1769.* この書に、„Vom deutſchen Hexameter, aus einer Abhandlung vom Sylbenmaaffe“ と題した序文が付いている。

¹⁹ Klopstock, *fämmtliche Werke*, S. 45–56.

²⁰ Klopstock, Friedrich Gottlieb: Vom deutſchen Hexameter. Erstes Fragment. In: *Ueber Sprache und Dichtkunst. Fragmente von K. Mit Ch[K]urf^eächfischer Freiheit. Hamburg, in der Heroldſchen Buchhandlung. 1779. Gedruckt in Altona, bei J.[ohann] D.[avid] A.[dam] Eckhardt.* S. 3–186.

²¹ 以下、Ebd. S. 144–146.

²² Klopstock, *fämmtliche Werke*, S. 45. この宣言は、13 年前に Klopstock, Friedrich Gottlieb: *Der Meffias. Zweyter Band. Mit K^{önigl.}[ich] Pohnl.[ischen] und Ch[K]urf.[ürstlich] Sächf.[ischen] K^{önigl.}[ich] Preußifchen und Ch[K]urf.[ürstlich] Brandenburgifchen allergnädigsten Privilegien. Halle, im Magdeburgifchen. Verlegt von Carl Hermann Hemmerde. 1756* に付した序文・「〔古典〕ギリシャ語の音節規則をドイツ語で模倣する方法 Von der Nachahmung des griechischen Sylbenmaffes im Deutſchen」の冒頭部分において下している宣言、すなわち、「〔古典〕ギリシャ語と〔古典〕ラテン語の音節規則をドイツ語で模倣すること」でドイツ語は「従来の詩型 Versart では達成できていなかった卓越性を獲得できる」との宣言よりもさらに気宇壮大である。

²³ Ebd. S. 52. ここでは Klopstock は数を明記していない。VdtH II では古典ギリシャ語の語脚を 17、ドイツ語語脚を 22 としている (Klopstock, *Ueber Sprache und Dichtkunst*, S. 4)。ところでホメロスの作品を一瞥すれば、Klopstock がこれが古典ギリシャ語の語脚の全てであるとして挙げている語脚型のどの型にも当てはまらない „μεταφρασόμεθα“ (*Ilias*, 1. 140) のような型 (v–vv–v) がすぐに見つかるのであるが。

²⁴ Ebd. S. 52–54.

²⁵ Klopstock, *Ueber Sprache und Dichtkunst*, S. 139.

²⁶ Ebd. S. 180.

²⁷ Moritz, Karl Philipp: *Verfuch einer deutschen Profodie. Dem Könige von Preuffen gewidmet*. Berlin 1786.

Goethe と Schiller が多大な感銘を受けた本書、ドイツ詩に対する計り知れない可能性を秘めている本書の第 2 書簡 (Euphem から Arist へ。S. 53–105) は詩脚に関する詳細な考察であるが、この考察は実例によらない抽象的な議論であり、本稿が参考にしうる部分は、Amb.に言及している箇所 (S. 56, 62, 64, 78, 103) にも、Amb.の実例に言及している箇所 (S. 91–92) にも、見出せない。Amb.が Kretikus (または Amphimacer. –v–) に比べると「響きに乏し weniger volltönig 」くどこか不完全に思われると述べている箇所 (S. 99–100) でも、最も不調和な響きのする Antispast (v–v) を形成しなければそれでよいと述べているだけである。

²⁸ これらの詩学者たちは、現代ならば強・弱 betont, unbetont という音節の区別を立てるところで高・低 hoch, tief という区別を立てているが、これは音節の強・弱を高・低と同一視していたということではない。むしろこれらの人々は、音節の強・弱、重・軽、明・暗についてもしばしば語っている。ドイツ語の音節を強・弱の区別でしか理解していないような場合と異なり、ドイツ語の言語音の多様な諸相を感知していたようである。この問題に関しては Schultz が現代の音声学等の知見を交えながら詳細に議論している。以下を参照— Schultz, Hartwig: *Methoden und Aufgaben einer zukünftigen Metrik*. In: *Sprache im technischen Zeitalter* 41 (1972) S. 27–51. Ders.: Klopstocks „Längen“ und verwandte Verselemente bei Holz und Brecht. In: *Wirkendes Wort* (WW) 23 (1973) H. 2. S. 111–125.

²⁹ Voß, Johann Heinrich: *Zeitmessung der Deutschen Sprache von J. H. V. Beilage zu den Oden und Elegieen*. Königsberg 1802. 韻文音調論 Prosodie においては „Zeit“ という語は韻律上の音価を意味する。この音価は、詩行中の各音節の発音時間量 (一言で „Quantität“ という) のことであり、よってこの場合には „Zeit“ には「時量」という訳語を充てることとする。„v“ が 1 時量、„–“ が 2 時量に相当する。たとえば „Sei der Gefang | vieltönig | im wechselnden Tanz | der Empfindung“ という Hexameter 詩行は、„Sei der Gefang“ という 6 時量の Choriambus 語脚 (–vv–)、„vieltönig“ という 5 時量の Palimbachius 語脚 (––v)、„im wechselnden Tanz“ という 7 時量の語脚 (v–vv–)、„der Empfindung“ という 5 時量の第 3 Päon 語脚 (vv–v) で構成されている。時量は合計で 23 時量で

ある。別の言い方をすれば、この詩行は、‘Sei der Ge-’ という 4 時量の詩脚 (-vv)、‘lang viel’ という 4 時量の詩脚 (--)、‘tönig im’ という 4 時量の詩脚 (-vv)、‘wechselnden’ という 4 時量の詩脚 (-vv)、‘Tanz der Em-’ という 4 時量の詩脚 (-vv)、‘-pfung’ という 3 時量の詩脚 (-v) で構成されている。時量は合計で 23 時量である。このように、西洋古典韻律に基づくドイツ語詩を議論する上では定量的な考察をするため、‘Zeit’ の訳語として「時量」が適切であると考えられる。なおこの場合の ‘Zeit’ は古典韻律における ‘mora’、‘tempus’ の訳語である。よって ‘mora’ をドイツ語表記した ‘Mora’ という語を用いて、1 時量 (v) を ‘1 Mora’、2 時量 (-) を ‘2 Moren’ などと表記する場合もある。なお ‘mora’ と同義である ‘tempus’ は「時」の意味であり、どちらも古典ラテン語であるが、古典ラテン語が韻文学を構築する上で全面的に依拠している古典ギリシャ語韻律ではこれらは ‘χρόνον’ または ‘σημείον’ と呼ばれ、‘χρόνον’ はやはり「時」の意味である (Vgl.: Hermann, Johann Gottfried Jakob: *Elementa doctrinae metricae*. Liber I. De numero et versibus in universum. Kap. 4. De mensura. Lipsiae [Leipzig] 1816. S. 18–20, hier S. 18)。

³⁰ Ebd. S. 143.

³¹ Ebd. S. 141–169.

³² Ebd. S. 144. 語脚の分割線表記は原文。

³³ Ebd. S. 149–150.

³⁴ Ebd. S. 150–151.

³⁵ この後の章で Amb.を「めめしい小躍り das unmännliche Getrippel」と評している (S. 193) が、これで、後に見る一般的な詩学書における Amb.への評言がすべて出揃っている。

³⁶ Ebd. S. 153.

³⁷ この見解は、1789 年 8 月 17 日に Eutin より Klopstock に宛てた Voß の書簡においても見られる。(兩人の往復書簡 (の一部) は 1831 年出版の『時量計測』増補第 2 版に付録として収録されている— Voß, Johann Heinrich: *Zeitmessung der Deutschen Sprache von J. H. V.* Anhang II. Briefwechsel zwischen Voß und Klopstock. Hrsg. v. Abraham Voss. Königsberg, 2. m. Zus. u. einem Ahg. verm. Ausg., 1831. S. 200–289)。ここでは古典ギリシャ語の Amb.を Voß は例に取り、‘ἐμὸν δέ’ の ‘-μὸν’ は

「律動上の」長めの発音を獲得すると述べている (ebd. S. 203)。

³⁸ Voß, *Zeitmessung*, 1802, S. 153.

³⁹ Ebd. S. 165–167.

⁴⁰ Voß, Johann Heinrich: *Publii Virgilii Maronis Georgicon Libri Quatuor. Des P. V. M. Landbau. Vier Gesänge. Übers. und erkl. v. J. H. V. Vorrede.* Eutin / Hamburg 1789.S. III–XXIV.

⁴¹ Voß, *Zeitmessung*, 1831, Anhang I. Ueber den deutschen Hexameter. S. 183–199. なおここに収録された時点では、序文には見当たらなかった記述—詩脚としての Trochäus (–v) の取り扱い (S. 183–184)、Ennius が「第 4 詩脚内の 2 短音節間の語または文の切れ目 caesura post quantum trochaeum」を置いた Hexameter 詩行 („corde capessere: semita nulla pedem stabilitat.“) への言及 (S. 193) 等—が追加されている。

⁴² Voß, *Landbau*, S. XVIII–XIX.

⁴³ Linckenheld, a. a. O., S. 74.

⁴⁴ Voß, a.a.O., S. XV–XVI.

⁴⁵ Zäsur を Voß はここでは „Einfchnitt“ と呼んでいる。Hexameter における Zäsur (caesura) に関する議論を詳細に見ることは今はできないが、ここで Voß が言及しているのは、題 3 詩脚内の Zäsur である Penthemimeres (τομή πενθημιμερής)、及び、第 4 詩脚内の Zäsur である Hephthemimeres (τομή ἑφθημιμερής) とこれと組である第 2 詩脚内の Zäsur とである。

⁴⁶ この „die Wülfe des Meeres“ という 1 まとまりとされている語脚は、すぐ上の „im Dunkel | der Buchen“, „das Zwitschern | der Vögel“, と同じく 2 つの Amb.とされなければならないはずなのであるが、そうはされていない。

⁴⁷ Voß, *Zeitmessung*, 1802, S. 166 に同型の議論が見られる。

⁴⁸ 註 37 参照。

⁴⁹ Voß, *Zeitmessung*, 1831, S. 208–211.

⁵⁰ 1789 年 8 月 27 日に Hamburg より Voß に宛てた Klopstock の書簡 (ebd. S. 204–206) より (S. 204)。

⁵¹ 同年 9 月 1 日に Hamburg より Voß に宛てた Klopstock の書簡 (ebd. S. 206–208) より (S. 206)。

⁵² Reinbeck, Georg: *Neue deutsche Sprachlehre zum Gebrauch für deutsche Schulen, verfaßt von Dr. G. R.*,

[...] (Nach der ältern deutschen Sprachlehre des Verfassers neu bearbeitet.) Von der Profodie oder Silbenmessung. Stuttgart 1812. S. 179–204, hier S. 196–197.

⁵³ Grotefend, Georg Friedrich: *Anfangsgründe der deutschen Prosodie. Als Anhang zu den Anfangsgründen der deutschen Sprachlehre und Orthographie, vorzüglich zum Gebrauche in Schulen entworfen von Dr. G.[eorg] M.[ichael] Roth*. Erster Theil. Zweite Abtheilung. Zweiter Abschnitt. Erstes Hauptstück. §. 65. Giessen 1815. S. 117–118.

⁵⁴ Heyse, Karl Wilhelm Ludwig: *Kurzgefaßte Verslehre der deutschen Sprache zum Schul- und Hausgebrauch*. Hannover, 2. umgearb. verm. Ausg., 1825. §. 120. S. 72.

⁵⁵ Ebd. §. 179. S. 110–111.

⁵⁶ Reinbeck, a.a.O., S. 197.

⁵⁷ Heinsius, Theodor: *Sprachlehre der Deutschen*. Erster Theil. Sprachlehre, oder die Anweisung, richtig zu sprechen. Dritter Abschnitt. Die Profodie. Kapitel 2. Von den Gliedern eines Verses. In: *Teut, oder theoretisch-praktisches Lehrbuch der gesammten Deutschen Sprachwissenschaft. Erfter Theil*. Berlin, 4., durchaus verb. u. verm. Ausg., 1825. S. 397–408, hier S. 399–400. この記述は初版 (1807 年) には見つかからない。第 2～3 版は入手できなかった。

⁵⁸ とはいえ、終生この警戒を怠らなかったであろう Voß は、A. Schlegel によると、7 万行の Hexameter 詩行を書いている (Schlegel, August Wilhelm: *A. W. v. S.s. sämtliche Werke*. Hrsg. v. Eduard Böcking. Bd. 1–16. Leipzig: Weidmann'sche Buchhandlung, 1846–1848. – Bd. 10. A. W. v. S's. vermischte und kritische Schriften. Bd. 1. Sprache und Poetik. 1846. S. 188)。その中のホメロス、ヘシオドス、ウェルギリウス、オウィディウス、ホラティウス等々の翻訳は、現在、西洋古典のドイツ語欽定訳とされている。

⁵⁹ Minor によると、西洋古典の韻律学においてすでに語脚と詩脚の区別が立てられており、同型の語脚が並列するのは「極力」避けられていた、ドイツ語には語幹と屈折語尾から成る 2 音節語が優勢であるために、このことは古典ギリシャ語・古典ラテン語ほどたやすくは行えないとのことである (Minor, a. a. O., S. 156–157)。Minor の考察から、ドイツ語では Trochäus (–v) の語脚が作られやすいということが理解できる。そしてまた、この言語では、「語幹と屈折語尾から成る 2 音

節語」に 1 音節の冠詞やいわゆる強勢のない 1 音節の接頭辞が先行することが非常に多く、Amb. もまた極めて作られやすいということが理解できる。

- ⁶⁰ 西洋古典詩の模倣を志向する 18 世紀後半～19 世紀前半にかけてのドイツ語詩人たちのうち Voß, Schlegel, Platen, Humboldt (部分的に F. A. Wolf) などは、西洋古典詩の規則を極力忠実にドイツ語詩で模倣しようとする詩人たちであったとして知られている。これらの詩人はその作風に一方的な非難が寄せられるのが通例であり、これらの詩人の思索や理念は十分には評価されていないと見受けられる。これらの詩人に冠される厳格派 *Rigorist* という呼称もまた非難を含意するのみであり、これらの人々が当時このように自称していたのでは無論ない。一方、本稿で便宜上自然派と呼んでいる Goethe, Schiller の西洋古典模倣韻文に対して、Schlegel が *Distichon* による短詩「同盟側の増上慢 *Uebermuth der Verbündeten*」にて次のような評言を述べている (Zitiert aus: Schlegel, August Wilhelm: *A. W. v. S.s. sämtliche Werke*. Bd. 2. A. W. v. S.s. Poetische Werke. Zweiter Theil. 4.–7. Buch. B. 6. Epigramme und litterarische Scherze auf Zeitgenossen. Auf Veranlassung des Briefwechsels zwischen Goethe und Schiller. Leipzig, 3., sehr verm. Ausg., 1846. S. 204–207, hier S. 206)。

Vielfach strebte die Welt: euch schien's, ihr wäret allein da;

Euch hieß jeder so gern Pfuscher und Naturalist.

Eure Hexameter sind der natürlichste Naturalismus:

Nimmer begriff eu'r Ohr jenes hellenische Maß.

西洋古典韻文模倣試作を試みている人は様々にいますが、お 2 人にはご自身しか

見えていないようですね。お 2 人のことを世人はモグリの自然派と呼んでいますよ。

お 2 人の *Hexameter* は自然派極まる自然派ですね。

古典 *Hexameter* がお耳に届いていないのでしょう。

Goethe, Schiller 代表とする非厳格派の西洋古典模倣韻文の作風は研究史上しばしば「自然的」と形容されるものであるが、Schlegel のこの評言からも、「自然派」という名称を用いる根拠を導出することができる。

- ⁶¹ Hehn, Victor: Einiges über Goethes Vers. I. Hexameter. In: *Goethe-Jahrbuch* 6 (1885) S. 179–197. —

Levy, Siegfried: Der deutsche Hexameter und Alexandriner. In: *Zeitschrift für deutsche Philologie (ZfdPh)* 54 (1929) S. 329–338. — Staiger, Emil: Goethes antike Versmaße. In: E. S.: *Die Kunst der Interpretation. Studien zur deutschen Literaturgeschichte*. Zürich 1955. S. 115–131. — Kayser, Wolfgang: *Geschichte des deutschen Verses. 10 Vorlesungen für Hörer aller Fakultäten*. Fünfte Vorlesung: Der Vers des 18. Jahrhunderts und Klopstock. Bern / München 1960. S. 43–61, bsds. 59–61. — Hötzer, Ulrich: „Grata negligentia“ – „Ungestiefelte Hexameter“? Bemerkungen zu Goethes und Mörikes Hexameter. In: *Der Deutschunterricht* 16 (1964) H. 6. S. 86–108.

⁶² 2. Nachträge zu Goethe-Correspondenzen. Im Auftrage der von Goetheschen Familie aus Goethes handschriftlichem Nachlass hrsg. v. F. Th. Bratranek. V. Familie Voss. In: *Goethe-Jahrbuch* 5 (1884) S. 38–112., hier S. 39. Voß が指摘しているような Trochäus (–v) の 3 つの連続というケースは『ライネケ』全作を通じて散見され、作品の最後の方でもみつかると (12. 113)。

⁶³ Zitiert aus: *Münchener Ausgabe [MA]*. – Bd. 4. 1: Wirkungen der Französischen Revolution 1791–1797 1. S. 282–435. 『ライネケ』に関してはこの版を参照する。

⁶⁴ Hauptmann, Gerhart: *Des grossen Kampffliegers, Landfahrers, Gauklers und Magiers Till Eulenspiegel Abenteuer, Streiche, Gaukeleien, Gesichte und Träume*, 1928. これは全 18 歌、7877 行の Hexameter 叙事詩である。

⁶⁵ *Frankfurter Ausgabe*. Bd. 3: Jambische und hexametrische Formen. S. 245–253.

⁶⁶ Stolberg, Friedrich Leopold Graf zu: *Homers Ilias verdeutscht durch F. L. G. Erfter Band*. Flensburg / Leipzig: [Johann Christoph] Kortens Buchhandlung, 2. rechtmäßige Aufl., 1781.

⁶⁷ Voß, Johann Heinrich: *Luise. Ein ländliches Gedicht in drei Idyllen von J. H. V. Königsberg*: [Matthias] Friedrich Nicolovius, 1795.

⁶⁸ Voß, Johann Heinrich: *Homers Ilias von J. H. V. I–XII Gesang*. Stuttgart / Tübingen, 5. stark verb. Aufl., 1821.

⁶⁹ Heusler, a.a.O., S. 80.

⁷⁰ Platen, August Graf von: *A. G. v. P.s fämliche Werke in zwölf Bänden. Historisch-kritische Ausgabe mit Einschluss des handschriftlichen Nachlasses*. Hrsg. v. Max Koch / Erich Petzet. Mit zwei Bildnissen des

Dichters und einem Briefe als Handschriftprobe. Bd. 1–12. Leipzig: Max Hefte Vlg., 1909. – Bd. 4: Gedichte. Tl. 3: Oden, [...]. Eklogen und Idyllen. S. 137–159, hier S. 139–141.

⁷¹ Schlegel, August Wilhelm: *A. W. v. S.s. sämtliche Werke.* Bd. 3. A. W. v. S.s. Poetische Uebersetzungen und Nachbildungen nebst Erläuterungen und Abhandlungen. Erfter Theil. I. Aus dem Indischen. Die Herabkunft der Göttin Ganga. Erfter Gefang. Leipzig 1846. S. 29–35.

⁷² Schlegel, a.a.O., Vom deutschen Hexameter. S. 19–25, hier S. 19.

⁷³ Heusler, a.a.O., S. 107.

⁷⁴ ルクレティウスの『事物の本性について *De rerum natura*』という 7415 行 (または約 7800 行) の Hexameter による古典ラテン語の教育目的詩 *Lehrgedicht* から冒頭 43 行を翻訳したものである。

⁷⁵ アラトスの『天界現象 *Φαινόμενα*』という 1154 行の Hexameter による古典ギリシャ語の教育目的詩から冒頭 84 行を翻訳したものである。

⁷⁶ Humboldt, Wilhelm von: *W. v. H.s. Gesammelte Schriften.* Hrsg. v. der Königlich Preussischen Akademie der Wissenschaften. Bd. 1–12. Berlin 1903–1936. – Bd. 8. Abtlg. 1: Werke VIII. 1909. S. 262–269.

⁷⁷ *MA.*, Bd. 4. 1., S. 551–629.

⁷⁸ *MA.* Bd. 6. 1: Weimar Klassik 1798–1806 1. S. 793–815.

⁷⁹ この行は原文が „significant initum percussae corda tua **vi**.“ という行末に単音節語を置く珍しい Hexameter (z. B.: *Aeneis*, 1. 65, 8. 679 / *De arte poetica liber*, V. 139) であり、これを Humboldt はドイツ語で再現しているのだとも考えられる。なお、„Macht“ は „vis“ の訳であって、Humboldt は原文 Hexameter の珍しい行末の語を、ドイツ語 Hexameter の珍しい行末の語に翻訳するという二重の原文模倣を行っていることになる。註 80・82 に見るように、Voß によるこのような行末も、原文の語と韻律構造の二重の模倣になっている場合がある。

⁸⁰ Voß, Johann Heinrich: *Homers Odyssee überfetzt von J. H. V. Hamburg 1781.* 原文の模倣と看做せる例 („[...] bei dir auch“ < „[...] σοί περ“ (1. 59) / „[...] du so, Zeus“ < „[...] ὠδύσαο, Ζεῦ“ (1. 62) / „[...] entflank Nacht“ < „[...] οὐρανόθεν νύξ“ (5. 294 / 9. 69)) もある。同翻訳の第 2 版 (Voß, Johann Heinrich: *Homers Odyssee von J. H. V. I–XXIV Gesang.* Altona 1793) には „[...] ein borstenumftarrt schwein“ (4. 457) < „[...] μέγας σῦς“ という有名な模倣がある。

⁸¹ Voß, *Laundbau*, 1789.

⁸² Voß, Johann Heinrich: *Homers Ilias von J. H. V. I–XXIV Gesang*. Altona 1793. やはり模倣としての行末が散見される—„[...] einmal Zeus“ < „[...] ποθι Ζεὺς“ (1. 128) / „[...] im donnergewölk Zeus“ < „[...] νεφεληγερέτα Ζεύς“ (1. 517–24. 64) / „[...] der welt(,) Zeus“ < „[...] μητίετα Ζεῦ“ (1. 508 / 8. 442 / 15. 12) / „[...] durchdrang weh“ < „[...] κυδάλιμον κῆρ“ (10. 16) / „[...] fürwahr Zeus“ < „[...] ἄρα Ζεὺς“ (14. 85) / „[...] fürwahr Zeus“ < „[...] ποθι Ζεὺς“ (19. 273) / „[...] des kriegs wut“ < „[...] τέτατό σφιν“ (17. 736) / „[...] des jammergefchicks Ker“ < „[...] ὀλοὴ Κήρ“ (18. 535) / „[...] umher glut“ < „[...] θεσπιδαῆς πῦρ“ (23. 216)。

⁸³ Voß, *Luise*, 1795.

⁸⁴ Voß, Johann Heinrich: *Des Publius Virgilius Maro Werke von J. H. V. Bd. 2–3. Äneïs. I–XII*. Braunschweig 1799.

⁸⁵ Voß, Johann Heinrich: *Des Quintus Horatius Flaccus Werke von J. H. V. Bd. 2. Satyren und Episteln*. Heidelberg 1806.